

澤田まゆみ (ピアニスト)

全十回のシリーズ

「演奏・展示・お話による

演奏会」 完結



現代音楽
2006年1月号

澤田まゆみは高崎市生まれ。十五歳

で自作のコンチェルトを群馬交響楽団と共演。芸大卒業後、リユーベック国立音楽大にてジェームズ・トッコに師事。帰国後、芸大大学院入学、ドビュッシーの研究にて修士号取得。ソロリサイタル、現代作品演奏、歌曲伴奏、室内楽など様々な分野で活躍するが、高崎シテイギャラリーにて五年に渡り行われている全十回のシリーズ「演奏・展示・お話による音楽会」がこのほど完結する。

—ではまず澤田さんがこの音楽会を企画したきっかけをお聞かせ下さい。

澤田 五年前ドイツから帰国した際、日本でクラシック音楽を演奏することにどんな社会的意味があるのかどんな演奏活動をしたらよいのかを必死に考えておりました。その答えがその音楽が生まれた土地や文化を尊重しながら

日本で演奏して行くということだったのです。

—トーク付きのコンサートはよくありますが、展示まで含めたものはあまり例がないのでは。

澤田 一つには留学中に作曲家所縁の地を訪ねた時にそこから受けたインスピレーションがとて大きく、どうしたらそれを演奏会の中で提示できるかということに演奏と展示とお話による音楽会という形を考えつきました。またプログラム解説をやめトークと作品に關係ある年表・写真・目録・絵画彫刻等をロビーで自由に見て動く方が

良いとも思いました。ホールにはドリンクの販売もなかったのですが、無料でソフトドリンクをお出しすることにしました。そのせいか休憩時のロビーはいつも大変な混雑です(笑)。ロビーに活気があると演奏会全体の雰囲気も、より一体感のあるものになります。

—なるほど三位一体のコンサートなんでしょうね(笑)。シリーズを終えるに当たっての感想はどうでしょう。

澤田 初めは小さな会でも続けられたらと思っていました。回を重ねるごとにお客様の層がひろがり五回目にしていきって登録制会員を募ったら百人を超える方が登録して下さいました。それでも運営、準備その他は大変で留學時代の友人や同級生、家族らの支えでここまでやってこられました。五年間で十人の作曲家に挑戦し私の中でピアニストとして弾きたいものもやっと見えてきたので今後は少しずつ方向を絞りながら活動していきたいと思っています。

—全十回、ベートーヴェン、モーツァルト、バッハ、ドビュッシー、ショパン、シューマン夫妻、リスト、ブラームス、山田耕掇と来て、シューベルトを最後に持って来た理由をお聞かせ願えますか。

澤田 彼の音楽からは深い誠実で、親しいものへの愛情、風のようなフアンタジーを感じます。五年前の企画の段階でシューベルトを持って来たというのは十人の中で一番最後に取り組みたかった作曲家だったということですが、それは簡単に手をつけたくない神聖さを感じていたからだと思います。

—生と死の狭間というか。生と死が隣り合わせになっている。マラーとかはちょっと前れ過ぎていような気もするけれど(笑)。

澤田 でも私はツェムリンスキーも大好きですよ。

—きつとウィーンの現代音楽の源流もシューベルトなんでしょうね。ピアニソナタ二十番の第二楽章とか。

澤田 どこへ行くのかわからない、風や光の変化のようなハーモニーを持つ即興曲でこのシリーズを閉じ、自分と対峙して新たな道を探したいと思っています。(聞き手=浅岡弘和)

—1/15、14時、高崎シテイギャラリーコアホール
arts bridge (電話027-337-5854)